

利用者に向き合い、想像し続ける

介護職に転身して半年足らず、バタバタ状態で冷や汗ものの毎日なのに、えんを代表して事例検討会で発表するという大役を突然、仰せつかった。われらがボス、小島美里さんは時々、とんでもない無茶振りをするのです。ご存じの方も多いかもしれませんが。

テーマは「事例から学ぶ認知症ケア」。昨年8月から利用されている全盲の70代男性の事例がよい、とのデイホームの先輩からのアドバイスで、早速資料の作成を始めました。月2回の利用ですが、朝夕の送迎をはじめ、同じ男性同士ということで比較的長い時間会話を交わしていたと思っていたのに、男性がデイサービスに何を求めているのか、なぜここに通ってきてくれるのかがはっきり見えていないことに気づかされました。「利用者本位のケア」を求められているのかかわらず、利用者の胸の内をちゃんと想像できていない自分のがっかり。事例検討という機会がなければ、気付かなかったと思います。



新座市立中央公民館2階研修室にて開かれた事例検討会の様子

自宅に送り届けた別れ際には「楽しかった」とおっしゃる男性。奥様に聞けば、デイに来る朝に「行きたくない」と言うこともあるとか。「楽しかった」のは本音でないのかもしれない。では、自分たちはどのようなケアの工夫をしたらよいのか。答えが出ないまま、当日を迎えたのでした。

グループでの討議で出た見方や意見、その後のグループ代表の方のご指摘には、自分がまったく思いもよらなかった視点がいくつもありました。ケアの方法で参考になるご意見も聞かせてもらいました。多職種で一つの事例に時間をかけて考えることの価値を、痛感したのでした。

この人はどんな思いで来ておられるのか。利用者さんのニーズは当然、一人一人違うわけですから、ケアで向き合いながら想像し続けるしかありません。想像の基本にあるべきは、利用者さんとの人間関係。「この人なら話せる」と思ってもらうため、日々の努力が欠かせないと思っています。

デイホームえん 五十住和樹